

# 事業報告書

平成 28 年度 指定就労移行支援事業所 のぞみ共同作業所・マイフレンド

## 1. 利用者の増加と利用者層の広がり

### (1)関係機関とのつながり

のぞみ共同作業所が行う就労移行支援事業について関係機関に知ってもらい取り組みを続けている。事業説明会を年 3 回開催したが、説明会当日に参加してくれた方だけに事業の説明をしたわけではなく、事前に医療機関や相談支援事業所を訪問し、説明会のチラシを渡しながらか話をさせてもらった。各機関のスタッフと直接会って話をすることで、必要なときに連絡を取りやすい関係をいくつも作ることができた。このことが、事業所の利用者が増加した主な理由の 1 つであると感じている。これまで関わりがあまりなかった機関のスタッフとも、日常的にやりとりができるようになり、一人ひとりの利用者への支援に厚みが出るという効果もあった。また、のぞみ福祉会の各事業所にも積極的に職員が出かけて、ミーティングやプログラムに参加し、多くの利用者の皆さんと出会うことができた。家族会主催の日帰りバス旅行では、家族の皆さんから普段思っていることをたくさん聞かせてもらった。利用者や家族の皆さんと出会い、思いを直接聞くことができ、就労移行支援事業の支援を見直す機会にもなっている。

### (2)利用者増加の影響

就労移行支援事業を知ってもらい取り組みを続けた効果もあり、1 年間で 8 名の新規利用者があった。人数が増えたことで事業所の雰囲気が全体的に盛り上がってきたように思う。様々な背景を持つ人たちが同じ場所で働き、お互いに刺激を与え合う、利用者の将来の就労に向けて良い環境を作ることができた。人数が多いことを活かした場面設定など、プログラムにも変化をつけられるようになった。一方で生産活動の提供の仕方や、事業所の限られたスペースをどのように使うかなど、年間を通して悩まされ続けた課題もあった。

### (3)利用者層の広がり

新規利用者の中には、就労の経験が豊富な人もいれば、働いたことが全くない人もいた。就労への意欲や、これまでの経験が一人ひとり違うので、一斉に行う取り組みの中でも個別の働きかけや対応が求められた。発達障がいを抱える利用者が増えているのも最近の特徴で、職員が発達障がいについての研修に参加し、適切な支援の提供を心がけた。

## 2. 利用者への支援内容

### (1)生活支援

利用者にとって企業に採用されることがゴールではなく、働き続けるためにどんな暮らしを送っていくか、その後も考え続けていく必要がある。就業生活を継続するためには、自宅での安定した生活が欠かせない。自分自身が日常的にどんなリズムで生活しているの

か、そのリズムが体調とどのように関係しているのか、利用者自身に知ってもらうことを目的に、生活ノートをつけることを勧めている。ノートに記入することで、すでにできていることや今後の課題について自分で確認でき、就職した後の生活についても想像しやすくなるのではないかと思う。生活ノート等を材料にしながら定期的に話を聞くことで、利用開始当初から自分がどう変わってきたかを把握してもらい、自信につながるように心がけた。時間はかかるが、この支援に時間をかけることが、就職後の利用者にとって必ず大きな力になると考えている。

入院などで長期間お休みが続いている利用者を支援する機会も多かった。就労を目指して事業所の利用を始められたが、結果的に就労に結びつかない利用者に対しても、一緒に将来について考え適切な事業やサービスに繋がれるよう支援している。

## (2)就労支援

就職活動において最も重要なのは自分自身を知ることではないかと思う。自分の長所を知り、どのような仕事内容や職場環境であれば力を発揮しやすいのかということについて、就職先の企業に伝えることができれば、継続して働きやすくなる。そのためには、過去の職歴や、現在の事業所内での生産活動の様子などを振り返って、自分のことを知る取り組みを深めていくことが大切である。利用者にとって決して楽な作業ではなく、職員は時に寄り添い、時に背中を押しながら一緒に考えることを続けた。また、職場実習も、具体的に職場で働くイメージをつかむための大切な場であった。より職場に近い環境の中、事業所でできていることが、事業所の外でも自分の強みとして出せるのか試す経験ができた。

本年度は、「働きたい」という強い気持ちを持つ人から就職を決めていく傾向があったように思う。職員も2年間という標準利用期間にこだわることなく、その時のその人に必要な支援を提供できるよう心がけた。就職者を祝う会では、4名の就職者をお祝いすることができた。就職者が月に1度集まって、職場での悩みや喜びを現在の利用者とともに分かち合う「のぞみんJライフ」、就職者が自主的に運営する余暇活動の場「リフパラ」への支援も続けた。就職者が年々増え、フォローアップの件数も増え続けている。どのような体制で個々の就職者への支援を続けていくことができるか、今後も検討が必要である。

## (3)プログラム

SST、ビジネスマナー講座など、就労に向けて役立つものの他、利用者が自分を知るために手助けになるようなプログラムを開催している。利用者層が広がる中で、利用者がどのような内容を求めているのか常にニーズを把握し、内容を更新していかなければならない。プログラムを開催して終わりではなく、日常の生活場面や事業所での過ごし方につなげられるよう努めた。毎週火曜日の運動プログラムは、楽しみながらもしっかりと体を動かすことを目的とし、体育館を借りて運動をする機会を増やした。

## 3. 生産活動

全員に同じ生産活動を提供するという方法の難しさを感じている。利用者層が広がり、

同じ作業に取り組んでいても一人ひとりの取り組む目的は当然違ってくる。個々の目的を把握しながらそれに合った生産活動を提供し、一人ひとりに働きかけていくことができる体制を今後も模索していかなければならない。

総合福祉会館の清掃は2年目を迎え、参加する利用者が増えている。一般の人たちの往来が多い場所で、一緒に働く人と声を掛け合って協力しながら作業を進めなければならない。事業所内では見られなかった利用者の姿を見られる良い機会になった。年4回のJR吹田駅北側遊歩道除草作業にも参加している。事業所内での作業に参加できる人数が限られているので、外部での仕事は今後も少しずつ増やしていきたい。

#### 4. 地域の中の事業所

3月のハートふれあい祭りに、就労移行支援事業所としては初めて飲食の屋台で出店した。売り上げが多かったことも嬉しかったが、販売を通して多くの人たちとふれあい、利用者がみな良い表情をしていたのが印象的だった。また、吹二地区の防災訓練に利用者と職員が参加した。吹二地区の自治会のみなさんと知り合いになるきっかけができ、今後さらに交流を深めていきたいと考えている。昼食会や近隣散策のプログラムの際は、ボランティアグループアムールの皆さんと本年度も楽しく交流させていただいた。

#### 5. 運営管理

##### (1)危機管理

法人内の防災勉強会に利用者と職員が参加し、障がい者の防災について研究した。また、神戸市の「人と防災未来センター」を見学し、過去の教訓に学びながらもしもの時のために準備をする機会とした。

##### (2)職員の資質向上、虐待防止への取り組み

発達障がいや就労支援など直接支援に関する研修に参加し、内部研修を実施した。アンガーマネジメントのように、職員の気持ちに寄り添う研修に参加できたことも意義深かった。また、防災や広報活動など、それぞれの職員が普段取り組んでいる仕事内容をさらに深められるような研修に参加した。第三者委員に事業所を訪問してもらい、事業所の利用者との交流の機会を持つとともに、法人の苦情解決体制について利用者に周知した。

##### (3)施設環境整備

作業室の様態替えを随時行い、多人数でも作業しやすい環境を整えた。

#### 6. 総括

職員がそれぞれの役割を意識しながら、増加した利用者一人ひとりを支援できるよう努めた。今後さらに個別のアセスメントを進め、個々の利用者が目指す就労を実現していくためには、職員が各々の役割を越えて情報を共有し、もっと支援について話し合える関係を作る必要がある。職員全員で意識を共有し、良い支援を目指していきたい。

平成 28 年度 事業実施状況

	事業所活動	その他
定例	就労移行支援事業連絡会(月 1 回)、全体プログラム(週 1 回)、SST(隔週 1 回)、ビジネスマン講座(隔週 1 回)、レクレーション(月 1 回)、運動プログラム(週 1 回)、利用者ミーティング(月 1 回)、就職者への支援(リフレッシュラゲイス、のぞみん J ライフ(月 1 回))	のぞみ福祉会職員全体会議(月 1 回)、のぞみ福祉会事務局会議(月 1 回)、就労移行支援事業スタッフミーティング(月 5~8 回)、精神障がい者に寄り添った吹田の防災を考える会(月 1 回)、すいたの輸運営協議会、すいたの輸役員会(月 1 回)、精神医療学習会(月 1 回)、吹田市障がい者の働く場事業団全体会(月 1 回)、他事業所のミーティングへの参加
4 月	就労講座「人に与える良いイメージ」「診察 SST」、生活講座「自転車交通安全」「昼食会(フィンガー&牛乳寒天)」、のぞみん J ライフ「休日、休憩時間の過ごし方」、のぞみ BBQ 参加(レク)	のぞみ家族会総会、作業所事業説明会、のぞみ BBQmtg、S リーク会議 利用者 1 名退所/1 名新規利用 23 日開所/245 名利用
5 月	就労講座「模擬面接」、生活講座「虐待防止について」「刈エテリング準備」、のぞみん J ライフ「仕事をして良かったこと」、写真プログラム、万博刈エテリング(レク)、S リークソフトボール大会	GW 休業(5/3~5)、吹田精神保健福祉ボランティアグループ「アムール」総会、知和メイト連絡会、大阪府法人集団指導、遊歩道除草作業説明会、工作所就労プログラム、のぞみ福祉会評議員会・理事会、防災プログラム mtg、S リークソフトボール大会 20 日開所/201 名利用
6 月	就労講座「所作、姿勢」「就ボツ説明会」、生活講座「震災について勉強会」、のぞみん J ライフ「さいころゲーム」、池田ラーメン博物館&池田城散策(レク)、サラン総会参加、JR 吹田駅北側遊歩道除草作業開始	施設連絡会総会、吹田市指導監督説明会、防災プログラム mtg、五月が丘地区防災委員会 HUG 訓練、ブルーリボン就労プログラム 23 日開所/244 名利用
7 月	就労講座「表情筋・姿勢」「電話 SST」、生活講座「夏場の体調管理」「防災について」、防災訓練「人と防災未来センター見学」、のぞみん J ライフ「仕事に行きたくないと思ったときの対処法」、シート流しそうめん大会参加(レク)	防災プログラム mtg、就労支援事業所連絡会、精神障がい者に寄り添った吹田の防災を考える会ワークショップ、集団指導伝達研修、S リーク会議、ブルーリボン就労プログラム、利用者 1 名退所(就労) 23 日開所/223 名利用
8 月	就労講座「自己分析」、生活講座「就職者を祝う会準備」、のぞみん J ライフ「休みの日の過ごし方」、就職者を祝う会、JR 吹田駅北側遊歩道除草作業	盆休み(8/13~15)、社福法人制度改革説明会、防災プログラム mtg、S リーク会議 利用者 1 名新規利用 24 日開所/214 名利用
9 月	就労講座「ストレス対処」「模擬面接」「休日の過ごし方」、生活講座「一人暮らしアイデアレシピ」、のぞみん J ライフ「座談会」、写真プログラム、海遊館(レク)、職場実習開始(1 名)	吹田市障がい者計画意見聴取会、S リーク卓球大会、精神障がい者に寄り添った吹田の防災を考える会ワークショップ、集団指導伝達研修、S リーク会議、吹田市福祉避難所説明会、「虐待って何?」(研修) 利用者 2 名退所/1 名新規利用 24 日開所/225 名利用
10 月	就労講座「面接の振り返り」、「企業見学前学習会」、生活講座「アイデアレシピ実践編」、「掃除マニュアル作り」、のぞみん J ライフ「近況報告、仕事の変化」、合同就職面接会、歯科検診、大阪市立科学館プラネタリウム(レク)、職場実習開始(1 名)	防災プログラム mtg、吹田ええもんフェスタ、S リークソフトボール大会、工作所就労プログラム、ブルーリボン就労プログラム、リハビリ帰り旅行、当事者主体的アプローチ研修 利用者 1 名新規利用 22 日開所/202 名利用
11 月	就労講座「就労継続支援 A 型事業所あむりた見学」「逆面接」「ハローワークについて」、第三者委員来所、のぞみん J ライフ「就職体験談」、のぞみふれあいコース 20 周年、佛教大学実習生 1 名受け入れ、ニル&エキスポシティ散策(レク)、JR 吹田駅北側遊歩道除草作業、職場実習開始(1 名)	のぞみ福祉会評議員会・理事会、防災プログラム mtg、精神医療学習会事例発表、ソフトボール大会、家族会日帰りバス旅行、精神障がい者に寄り添った吹田の防災を考える会ワークショップ、工作所就労プログラム、ブルーリボン就労プログラム、アソシエイト研修、「はたらくを一緒に考えよう」研修、作業所事業説明会、利用者 1 名新規利用 24 日開所/256 名利用
12 月	就労講座「メモの取り方」「姿勢、発声、顔筋トレーニング」、生活講座「防災バスター報告会」「大掃除」、のぞみん J ライフ「1 年間で振り返って、来年の抱負」、DVD 鑑賞&焼きうどん、ケーキ作り(レク)、打ち上げ(中華バケツ&プレゼント交換)、のぞみ防災バスター参加	年末年始休業(12/29~1/3)、精神障がい者に寄り添った吹田の防災を考える会バスター、防災プログラム mtg、広報研修、個人情報保護研修会、利用者 1 名新規利用 22 日開所/273 名利用
1 月	就労講座「就職ガイダンス」「企業見学前学習」、生活講座「今年やってみようこと」、のぞみん J ライフ「新年会たこ焼き作り」、吹田地区防災訓練参加、写真プログラム、カードゲーム大会(レク)、職場実習開始(1 名)	精神障がい者に寄り添った吹田の防災を考える会ワークショップ、発達障がい者就労支援センター、防災プログラム mtg、ブルーリボン就労プログラム、工作所就労プログラム 利用者 1 名新規利用 23 日開所/281 名利用
2 月	就労講座「エイ武田見学」「企業から求められる人物像」、生活講座「恵方巻き作り」「ハートふれあい祭り予行練習」、のぞみん J ライフ「シート餅つき大会」、カードゲーム大会(レク)、JR 吹田駅北側遊歩道除草作業、佛教大学実習生 1 名受け入れ	依存症の理解と支援について(研修)、知和メイト連絡会、遊歩道除草作業 mtg、ブルーリボン就労プログラム、聞きあうワーク、歯科検診意見交換会、職員健康診断、工作所就労プログラム 22 日開所/266 名利用
3 月	就労講座「身だしなみ」「レクレーションシートについて」「自己紹介」「SST について」、生活講座「ハートふれあい祭り最終確認」、のぞみん J ライフ「先輩たちの話を聞こう」、ハートふれあい祭り出店、メール便報告会 職場実習開始(1 名)	のぞみ福祉会評議員会・理事会、施設管理者防災研修、ブルーリボン就労プログラム、利用者 1 名退所(就労)/1 名新規利用 25 日開所/323 名利用

平成 28 年度 利用者概況と開所状況

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
15 名	7 名	5 名
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
275 日	2,953 人	

# 事業報告書

## 平成 28 年度 指定自立訓練(生活訓練)事業所 のぞみ workshop

### 1. 概況

#### (1)利用者数の状況

新規利用者は前年から倍増したが、利用年限を終えて退所した利用者も多く、在籍者数自体はほぼ横ばいだった。利用相談件数も増えたが、半数は「地域の社会資源を見たい」という内容だった。一方で、体験通所の 6 名はいずれも本人もしくは支援者が生活訓練の必要性を意識して相談に来たため、ほぼ利用に繋がっている。また、本年度の特徴としては、閉居して社会との繋がりを絶ったり、訪問看護やヘルパーの支援だけでは限界を感じていた家族や支援者が「なんとかしてほしい」という切実な思いから相談に訪れ、利用に繋がったケースが多かった。(※表 1)

表 1 利用者数 ( )…昨年実績

当初在籍	新規入所	退所終了	
10名(10)	6名(3)	5名(4)	
利用相談件数	体験通所者数		
12件(9)	6名(2)		
新規利用者の紹介経路			
相談支援	保健所	医療機関	その他
2名	1名	1名	2名

#### (2)利用者層

利用者の年齢別割合(※表 2)は例年と変わらず、50 代以上の利用者が漸減傾向にある。「生活訓練＝ステップアップ」というイメージが強く、ステップアップとは違う方法でリハビリを目指したい世代には戸惑いを与えていることが理由かも知れない。実際にはステップアップだけが事業の目的ではなく、入所時の利用目的では「社会活動の充実」、「再入院の防止」、「他者と関わる練習」の合計が「就労への準備」を上回っている(※表 3)。事業所の雰囲気も、就労を意識する利用者が多かった前年度までに比べてとても穏やかで、それぞれが自らの目標と状態に合わせて落ち着いて利用できている。

表 2 年齢・男女割合

年齢層	男	女
50代～	1名	0名
40代	4名	2名
30代	5名	1名
20代	1名	2名
全世代合計	11名	5名

ただ、利用者のほとんどが利用開始後 3 か月から 1 年ほどであることから(※表 4)、これから力と自信を取り戻す中で、事業所の雰囲気も以前のような活気と勢いが出るかもしれない。活気は大事にしつつも、利用者が安心してそれぞれのペースに合わせた過ごし方ができる雰囲気は維持し、誰もが利用しやすい事業所にしていきたい。

#### (3)通所状況

前年度に比べ、1 人当たりの月平均通所日数や 1 日の平均通所者数が減少しているのは(※表 5)、訪問による支援により、自宅から出ることを目標にする利用者の割合が増えたためである。この利用者層が順調に力をつけて、通所が増えれば生活訓練の新たな価値が発信できる。また、通所者が少ないと事業所という社会が持つ可能性も乏しくなる。事業所の魅力を高めるためにも、新規利用者の獲得を含め、通所者が増えるように努力を続けたい。

表 3 当初の目標

就労までの準備	6名
社会活動の充実	6名
再入院の防止	2名
他者と関わる練習	2名
総利用者数	16名

表 4 利用期間別人数 (H29.3.31 時点)

2年以上	3名
1年半～2年未満	0名
1年～1年半未満	2名
1年未満	6名
総利用者数	11名

表 5 通所日数など ( )…昨年実績

1人当たりの平均通所日数	12.03日 (16.64)
1日当たりの平均通所者数	6.05人 (6.60)

#### (4)プログラムの実施状況

午前は調理や買い物などの生活技術プログラムと、リサイクル店舗を利用した作業プログラムを行い、午後にはデッサンや茶道などの文化活動プログラム、頭の体操や栄養勉強会などの学習プログラム、卓球やヨガ、ソフトバレーボールといった軽スポーツプログラムなど、20種類以上の多彩なグループワークを実施した。

本年度の特徴は、他者と関わるきっかけを求めて利用を開始した者が多かったため、プログラムが媒介となって他者と同じ時間を過ごし、様々な体験を共有できるように工夫したことである。その中で、夏に取り組んだJR吹田駅北側遊歩道や、マンションの除草作業では、ともに汗をかき、励まし合うことで、支え合う仲間がいることの尊さを知る貴重な経験となった。また、リコーダーでは7回ものステージ演奏の機会を得たが、そこでも利用者リーダーを中心に練習を重ねる中で、協力して素敵なステージを作ることの難しさと楽しさを事業所全体で共有できるように取り組んだ。今後も、この姿勢を大切にして、「プログラムは技術向上や課題解消のためのトレーニングではなく、利用者が生活の楽しさや自らの可能性に気づくためのもの」という基本的な考え方を利用者に伝えていきたい。

## 2. 平成28年度事業計画に対する取り組みの状況

### (1)利用者それぞれに合わせた生活訓練を模索する

本年度も利用者一人ひとりに合わせた生活訓練を常に考え、退職者のリワーク支援、退院後の地域定着、体力や生活技術の向上など様々な利用目的に合わせた支援を行った。

その中で、訪問による生活訓練では単に体調管理や安全確認、自宅での困りごと解消だけを目的にしない、生活訓練ならではの訪問支援を模索した。

訪問による生活訓練の利用者は、自宅に閉居し、社会との繋がりが少ない者が多かった。そこで、職員の訪問を受けて利用者が社会への興味を持てるように、職員が「社会との窓」になることを心がけた。まず、頭の体操や茶道など事業所で実施するプログラムを自宅で行い、楽しい時間を他者と共有する機会を提供した。そして、徐々に自宅を出て、食事や買い物など、まちには暮らしを彩る様々な楽しみがあることを一緒に確認した。その外出先の一つとして事業所を覗いた利用者は、次第に事業所のプログラムを楽しむために通所し、現在は人と会うことを求めて通所するようになっている。

この試みは他の利用者にとっても、高い意義があった。緊張し、態度も素っ気ない利用者に対して、ある者は優しくプログラムに誘い、ある者は自らのしんどさを語り、それぞれが自分なりの方法で距離を縮めようとしていた。利用者同士がそれぞれの違いを認め合い、仲間として、自分ができることを探す姿に、生活訓練は利用者職員だけで作られるのではなく、事業所に集う人々で構成された「社会」で作られていくことに気付かされた。

### (2)地域に溶け込み、社会資源としての価値を高める事業運営を目指す

地域と交流するのではなく、地域に溶け込むことをテーマに事業を運営した。まず、商店街での書類配布を利用者が担当し、自治会の防災訓練では事業所全員で準備や片づけを

手伝った。公民館や自治会、福祉委員会など、地域の諸団体から依頼されたりコーダー演奏は、単なる活動発表ではなく、地域から事業所に期待された役割と捉え、客層や時季に合わせたステージ構成を利用者と考えて準備した。この姿勢を続けたことで、自治会や商店街からは、以前より気軽に新たな行事への声を掛けられるようになった。また、バザーや公民館文化祭、体育館や体育振興委員会が主催するスポーツ教室やグランドゴルフ大会など様々な地域行事をプログラムに活用し、利用者と市民が共に活動し、楽しむ時間を大切にした。これにより、多くの方々が利用者一人ひとりに親近感を持つようになり、行事の中だけでなく、街角でも利用者が気さくに声をかけられるようになった。事業所と利用者のそれぞれが、地域を構成する一員として存在感を持つことの意味を再確認した。

### 3. 運営管理

#### (1)危機管理

避難訓練は事業所内だけでなく、外出先での被災も想定して実施した。また、「精神障がい者に寄り添った吹田の防災を考える会」に利用者全員で参加し、講演会やワークショップ、防災バスツアーなどを通して、様々な立場の方々と共に学ぶ機会を設けた。

#### (2)人権擁護と虐待防止への取り組み

利用者向けの虐待防止勉強会や、事業所評価アンケートなど利用者から率直な意見を聴く機会を設け、そこでの意見を基に不適切な関わりや支援がなかったか職員同士で点検した。また、第三者委員と利用者が気軽に交流する機会として、昼食&茶話会を開催した。

#### (3)職員の資質向上

倫理観や支援技術向上のために、職員が各自の課題に基づいて、様々な研修に参加した。また、自立訓練(生活訓練)実践技術研修会や、大阪を中心とした生活訓練事業のネットワーク会議である「大阪生訓 NET」に参加し、他団体と様々な実践報告や情報交換を通して刺激し合い、事業の価値や可能性について気づきを得る機会となった。

### 4. 課題と対策

本年度も利用者の少なさという例年の課題が解消されなかった。行政や医療機関、相談支援事業所へ事業説明を行う中で、「生活訓練は分かりにくい。就労したい人は就労移行、そうでない人は就労継続B型か生活介護を単純に紹介する」という話が印象的だった。実際に、新規入所者の紹介元は、過去に連携した経験がある医療機関や、毎月のプログラム体験会や連絡会に参加して、事業所の活動を理解している支援者がほとんどだった。今後は資料やスライドでの分かりやすい事業説明や、気軽に参加できるプログラム体験会を積極的に実施するだけでなく、普段の支援活動において、これまで以上に他機関との連携を意識し、質の高い支援を共にすることで生活訓練の魅力を発信したい。

平成 28 年度 事業実施状況

	事業所活動	その他
定例	店舗運営・昼食会(毎日)、内職(不定期)、ポスティング(毎月)、連絡会(月 1 回)、ヨガ(月 2 回)、卓球・レクスポーツ・健康ストレッチ・頭の体操・ペン字・書道・茶道・家事検定・デッサン教室(月 1 回)、リコーダー教室・栄養勉強会・ポストカード教室(月 2 回)、就労移行プログラム(月 1 回)	全体 mtg(月 1 回)、事務局会議(月 1 回)、ソフトボール・バレーボール(月 3 回)、吹田市精神保健福祉ネットワーク会議(隔月 1 回)、吹田市障がい者授産製品常設展示販売運営協議会会議、S リーグ mtg、吹田の障がい者の働く場事業団、吹田市障がい者施策推進委員会、防災を考える会、のぞみ家族会定例会・役員会
4 月	施設外訓練「大阪歴史博物館・NHK」、浜屋敷で写真会、吹東地区福祉委員会リコーダー発表、のぞみ合同 BBQ 大会	のぞみふれあいコーラスコンサート mtg、BBQ 大会 mtg、のぞみ家族会総会、虐待防止勉強会
5 月	休みの日プログラム「朝食バイキング・ボウリング大会」、浜屋敷手作り市、施設外訓練「岸和田城」、JR 遊歩道の除草作業	BBQ 大会 mtg、S リーグソフトボール大会、中通り商店街総会、ボランティアグループ「アムール」総会、
6 月	JR 遊歩道の除草作業、施設外訓練「神戸どうぶつ王国」、ナイトプログラム「箕面の滝でホテル観賞」	生活訓練研修、のぞみふれあいコーラスコンサート mtg、S リーグバレーボール大会、施設連絡会総会
7 月	浜屋敷「七夕」、防災を考える会、施設外訓練「東映太秦映画村」、精神障がい者ボウリング大会、	研修「さまざまな人権問題に関する研修会」、法人内伝達研修、生活訓練研修
8 月	ナイトプログラム「サッカー観戦」、大掃除、テーブルマナー教室「京都 Animo」、休みの日プログラム「朝食バイキング・ボウリング大会」、JR 遊歩道の除草作業	生活訓練研修、中通商店街納涼祭、就労移行就職を祝う会、大阪府バレーボール実行委員会、進める会研修、
9 月	JR 遊歩道の除草作業、マンション除草作業、休みの日プログラム「吹三地区グランドゴルフ大会」、施設外訓練「和詩倶楽部・二条城」	新人研修フォローアップ、法人内伝達研修、仲通り商店街総会、吹三地区公民館文化祭会議、虐待防止勉強会、生活訓練研修
10 月	施設外訓練「法隆寺」、第三者委員交流会、歯科検診、浜屋敷手作り市、吹三地区公民館文化祭リコーダー発表、	S リーグソフトボール大会、のぞみふれあいコーラス 20 周年記念コンサート mtg、虐待防止研修、生活訓練研修
11 月	JR 遊歩道除草作業、防災を考える会、施設外訓練「実相院」、吹東地区福祉委員会リコーダー発表、六地藏自治会親睦会リコーダー発表、のぞみふれあいコーラス 20 周年記念コンサートリコーダー発表、就労移行支援事業との合同プログラム「卓球」	サービス管理責任者研修、研修「感染症予防対策講習会」、生活訓練研修、中通り商店街懇親会、のぞみ家族会日帰り旅行「和歌山」、研修「アンガーマネジメント」、研修「個人情報保護研修会」、進める会研修
12 月	障がい者週間の集いリコーダー発表、防災を考える会「神戸バスツアー」、吹六地区福祉委員会いきいきサロンでのリコーダー発表、大掃除、テーブルマナー教室「粟ならまち・興福寺」	研修「コミュニケーション研修会」、ポストカード展、生活訓練研修、理事会、相談支援体制について聞きとり
1 月	初詣、えびす祭り、防災を考える会、施設外訓練「京都市市民防災センター」、休みの日プログラム「ラグビー観戦」、防災訓練「吹田市一斉合同防災訓練」	家族会新年会、評議員選任委員会、生活訓練研修、研修「自立訓練(生活訓練)実践技術研修会」
2 月	JR 遊歩道除草作業、施設外訓練「京都鉄道博物館」、	市長懇談会、サービス管理責任者研修、大阪府バレーボール実行委員会、歯科検診意見交換会、生活訓練研修、
3 月	ハートふれあい祭りリコーダー発表、施設外訓練「なんばグラウンド花月」、テーブルマナー教室「神戸コンチェルト」	評議員選任委員会、理事会・評議委員会

平成 28 年度 利用者概況と開所状況

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
10 名	6 名	5 名
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
259 日	1,588 人	

# 事業報告書

平成 28 年度 指定生活介護事業所 ブルーリボン・きらめき

## 1. はじめに

本年度は、ブルーリボン・きらめき共に職員の数が充足せず、他事業所の職員の力を借りることで、何とか事業運営を行ってきた。利用者のその都度の思いや、雑談等のお話もじっくりと聴ける時間を確保できず、利用者への個別の支援や、通所が安定しない利用者への支援を丁寧に行うことができなかつた反省がある。一方で新規利用者も入ってきたこともあり、職員数が少ない中でも、利用者自身で意欲や希望を見出し、地域生活において利用者が持つ本来の力が発揮できるような場の雰囲気を作り出すことを意識してきた。そのことによって、利用者が本来持っている「人を大切にする力」をたくさん見ることができ、本年度はその「人を大切にする」ということを基盤とした活動を行ってきた。

## 2. ブルーリボンの取り組み

### (1)利用者の取り組み

前年度から、「すいたんのおやつ」<sup>※1</sup>作りを、ブルーリボンに利用者全員で取り組むようになって以降、これまで喫茶とコーヒー染めで分けていた生産活動を、分け隔てなく全員が取り組むことができるようにした。これは、「すいたんのおやつ」作りを全員で行うことから、利用者同士がそれぞれの利用者を尊重しあい、利用者同士でエンパワーメントしあい、共に歩むことができたからである。本年度は、喫茶の外販やバザー、クッキーのラッピング袋作り、「さたけん家」<sup>※2</sup>用のサラダ作り、そして創作活動である音楽の会や朗読工房などの活動にブルーリボン全体で取り組んできた。その結果、過去には確実に存在した、喫茶利用者とコーヒー染め利用者の垣根が完全になくなった。これにより、これまでにはない利用者同士やボランティアとのつながりを感じることができた。他者とのつながりを実感できることは、お互いの生き方を認め合い、そして認めてもらえるという安心感が、また新たなニーズを生むことができる。共に歩むという雰囲気を作ることで、多くの利用者が希望を持ちながら日々の生活を送ることができるようになった。

### (2)利用者が活躍できる場

本年度は、さたけん家障がい者週間、五月が丘福祉委員会との交流会「輪にネット」、地域からの依頼によるコーヒー教室、利用者によるトーク企画をはじめ、様々な場面で利用者が活躍し、その活躍を地域の方々に見ていただく機会を例年以上に作る事ができた。そしてこの取り組みのほとんどは、地域の方々と共に企画、開催してきた。地域の方々も障がい者支援において何かをしたいと思いながら、何ができるのかと迷っている方も多い。そんな方々が、ブルーリボンとつながりが持てたことで、我々と一緒なら何かができるという期待を持ってくれていることを感じた。これまで地域との関わりを本当に大切に

※1「すいたんのおやつ」：吹田市内でブルーリボンを含む5か所の障がい者事業所が、共同受注で制作したクッキー。主に障がい者賃金向上支援事業の授産製品アンテナショップ、「HAPPY&SMILE」にて販売されている。

※2「さたけん家」：佐竹台地区の世代間交流を図る「佐竹台スマイルプロジェクト」のコミュニティスポットカフェ。主に佐竹台の住民によって運営され、ブルーリボンは毎週木曜日に1日店長を務めている。

地道に活動してきたが、やっとそのことが地域から認められ必要とされる事業所に成長してきたことを感じた 1 年だった。地域の中でつながりの輪が広がることは、利用者の地域生活を豊かにしていくものになる。今後も地域と協同で行う活動を、一層進めていきたい。

### (3)利用者が思いを語る場

本年度は、就労を考える利用者の就労ミーティング、作業後のお茶タイムなど、利用者が様々な場面で自分の思いや希望を語る場ができた。利用者の多くはこれまで社会との接点を持てなかったことから、ブルーリボンでは活動の中で常に人の温かみを感じることができるように取り組んできた。それにより、利用者が過去の苦しかったことも、無かったことや忘れたいことにするのではなく、その時期を否定せずに自分の人生として受け止めることができるようになってきた。そして、人とのつながりの中で、自分もできることがあるという自己肯定感を高めることができ、これからの自分の生き方に対して希望を持つようになった。このような声がたくさん聞けたことは、この 1 年の中で大きな変化であり、利用者が生きることの楽しみを感じるという、ブルーリボンがずっと目標としてきたことが、少しずつ実現できている。そして利用者がそのように感じてきたのは、職員だけでなく、他の利用者やボランティア、地域住民など、周りに人がいるということがその実感を生んでいる。ブルーリボンの活動、そして人との出会いを通して、生きる意欲と希望を見出ししていくことができ、そしてこの雰囲気は今後はもっと地域にも広げていきたいと思う。

## 3. きらめきの取り組み

### (1)利用者の取り組み

本年度も、それぞれのペースで自由に過ごせる空間を大切にし、利用者の中から溢れてくる意欲や希望に寄り添う中で、新たにいくつかの変化があった。例えば、かつてはきらめき以外の人が来た際には緊張感があったが、今は受け入れることができる雰囲気になった。これは、利用者の顔ぶれが変わったことも理由ではあるが、ある一人の利用者の存在が大きいと感じる。初めてきらめきに来る方にお茶を入れ、気さくに話しかけるなど、その温かい人柄が伝わり、全体の雰囲気が新しい人を受け入れるようになった。現在はブルーリボンときらめきの両方を利用したり、きらめきに休憩に来るブルーリボンの利用者もいるなどオープンな環境になりつつある。また、当初は本人の意思ではなく主治医からの指導で通所し、サロンでも静かに過ごしていた利用者が、今では職員に冗談を言うようになり、気の合う利用者と共に将棋を楽しみ、語り合う機会が増え、自分らしく生き生きと過ごすようになった。

### (2)利用者から沸いた意欲や意見に着目したイベント、プログラム

利用者が自由に過ごせる環境を維持したことにより、それぞれの利用者から本当に興味があることや、意欲的な声が上がリ、それらを実現するためにイベントやプログラムを開催する機会が増えた。例えば、昔よく豆本を作っていたという利用者に講師を担ってもらい、豆本プログラムを開催した。また前年度から続けている楽器練習は、「輪にネット」の

オープニング演奏や、目標であったクリスマス会での演奏を達成できた。このことは演奏した利用者にとっても大きな自信となり、次年度の「輪にネット」に向けて練習を続けている。また、長年共に過ごしてきた利用者が亡くなった際は、偲ぶ会を開催したいという声が上がリ、各自写真を持参して会を開催することができた。さらに、前年度から計画してきた旅行もついに開催することができ、ある利用者はその経験を通して、東京旅行に行くという新たな目標を持つようになった。利用者と共に過ごす時間を大切にし、利用者の中から生じる想いを聴く姿勢は今後もきらめきの強みとして大切に継続していきたい。

### (3)長期入院者の退院支援

長期入院中だった方が、きらめきの利用につながった。この方とは、これまでは電話だけの繋がりであったが、その関わりを続けたことで、退院を諦めていた気持ちが再び地域で暮らしたいという思いに変わり、無事に退院された。事業所としての支援内容からは外れるものだったかもしれないが、地域で暮らすことのできる喜びを共有することができた。

## 4. 運営管理

### (1)権利擁護

利用者の意思決定支援に関する研修、精神障がいだけでなく様々なマイノリティの話を知る研修、制度だけでなく世界人権宣言を基盤にした福祉の在り方を学ぶ研修などに参加し、合理的配慮の概念も含め、人を大切にすることに職員が真摯に向き合うことに努めた。

### (2)危機管理

防災体験、防災避難訓練、防災ワークショップを開催した。その際には、障がい者の災害対策は地域課題であると捉え、福祉委員会・ボランティアグループ・社会福祉協議会などの共催で行い、地域の自治会の皆さんにも参加していただき、常に地域の方々と顔見知りになれる関係の構築に努めた。

## 5. 総括

生活介護では、人と人が繋がることによる利用者のリカバリーをこれまでも目指してきたが、その中で人から大切にされている実感を持つことを実現できた1年だった。これはスタッフの意図した動きだけではなく、利用者も他者から大切にされている実感から、他者も大切にすることが芽生え、全員で支え合う相互援助が展開されている。利用者同士で、しんどくても来所できた人に声を掛け合い、久しぶりに来所した利用者を「会いたかった」と言って囲い、活動終了後も利用者同士で集まって過ごす時間が増えている。

人を大切にすることは、人の良いところも悪いところも受け入れながら、みんなでみんなに寄り添いあうことである。事業所内がそのような雰囲気だからこそ、利用者にとっても安心して通える場となり、本年度は利用者の通所日数も増えた。立場を分け隔てなく人が人を大切にするのが、利用者の生活の中で最も求められていることが分かった。今後この考えを基本姿勢にした生活介護事業を展開していきたい。

平成 28 年度 事業実施状況

	事業所活動	その他
定例	青藍荘・保健所・亥子谷コミセン・佐井寺中学校・豊津中学校・角谷クリニック・チャクラ・HAPPY&SMILE・YogiYogi・ふらっとサロン・サフラン・シードなどケーキクッキー販売・配達(毎月 1 回程度)、喫茶営業(毎日)、コーヒー染め(毎日)、すいたんのおやつ作り(週 2 回)、さたけん家(週 1 回)、連絡会(隔月 1 回)、朗読工房(月 1 回)、音楽の会(月 2 回)、お昼ごはんでっせえ(月 1 回)、らくちん会(毎週火曜日)、パソコンサロン(木曜日)、ヨガ(月 1 回)、BRmtg(月 1 回)、就労 mtg(月 1 回)、ヨガ(月 1 回)、太極拳(月 1 回)、夕食会(週 2 回)、腰痛体操(週 1 回)、ストレッチ(月 2 回)、まったりいの会(月 2 回)、きらめき mtg(月 1 回)、レクリエーション(月 2 回以上)、散歩(週 1 回程度)、のゼミ(月 1 回)、健康勉強会(月 1 回)、看護師相談(月 1 回以上)、看護職員特別プログラム(月 1 回)	全体会議(月 1 回)、事務局会議(月 1 回以上)、生活介護職員会議(月 2 回)、ブルーリボン会議(月 1 回)、きらめき会議(月 1 回)、理事会(開催時)、ボランティア養成講座実行委員会(開催時)、障がい者週間の集い実行委員会(開催時)、きしべちびっこ祭り実行委員会(開催時)、NPO 法人すいたの輪運営協議会・役員会(月 1 回ずつ)、吹田の障害者の福祉と医療を進める会(月 1 回)、日中活動部会・事務局(月 1 回ずつ)、亥子谷障がい者支援部会(月 1 回)、共同受注会議(月 1 回)、防災勉強会(月 1 回)、新人研修聞くワーク(月 1 回程度)、施設連絡会幹事会(隔月 1 回)、五月が丘防災委員会(月 1 回)
4 月	カラージュ作り・沢知恵コンサート手伝い・のぞみ合同パーベキュー	家族会総会、ボランティアフェスティバル実行委員会
5 月	YogiYogi 出張カフェ、ボランティアフェスティバル、コーヒー教室、各地教会クッキー配達、手作り市、S リーグ応援	アムール総会、大阪府集団指導、ボランティアフェスティバル実行委員会、意思決定支援研修
6 月	YogiYogi イベント「楽楽」、YogiYogi 出張カフェ、YogiYogi コーヒー染め教室、YogiYogi コーヒー教室、すいたんのおやつ交流会実行委員会、防災体験、花園大学生実習	感染症予防研修、進める会総会、施設連絡会総会、意見聴取会、HUG 訓練講習会、研修障がい者と戦争、輪にネット会議、地域精神医療研修
7 月	YogiYogi コーヒー染め教室&トークイベント、すいたんのおやつ交流会実行委員会、防災体験、青藍荘夏祭り、青山台夏祭り、佐井寺納涼祭り、障がい者歯科検診、大阪人科大 10 名見学実習、七夕プログラム、映画鑑賞会、ニゲラより見学	輪にネット会議
8 月	もみじの家より見学、佐竹台地区夏祭り、就職者を祝う会、すいたんのおやつ交流会実行委員会、ワークセンターより見学、障がい者歯科検診、輪にネット五月が丘交流会、映画上映会、大掃除	社会福祉法人改革説明会、輪にネット会議
9 月	防災訓練、クリスチャンバザー、すいたんのおやつ交流会、朗読工房 20 周年出演	シュトーレン研修
10 月	防災ワークショップ、市民体育祭、〇っと千里山秋祭り、東佐井寺公民館文化祭、甲東教会バザー、ええもんフェスタ、手作り市、啓発パネル展、大阪保健福祉より実習生、収穫体験、おいもパーティー、障がい者支援部会講演会、大関さんをしのぶ会	五月が丘地区共同募金、研修「当事者主体的アプローチ」
11 月	千里キャンドルロード、豊津・片山中社会体験、コーヒー教室、いのっこ祭り、ペイフォワード倶楽部コンサート出店、クリスマスリース作り、YogiYogi トークイベント、社協出張喫茶、コーラス 20 周年出演、収穫体験、第三者委員交流会、豆本作り	五月が丘防災訓練、大阪人科大ボランティアフェスティバル、家族会旅行、意思決定支援研修、吹田の障害者施策の歴史研修
12 月	障がい者週間、亥の子谷音楽祭、クリスマス会、お正月飾り作り、大掃除、忘年会	障がい者週間シンポジウム、さたけん家障がい者週間会議
1 月	さたけん家障がい者週間、大阪人科大より 10 名見学実習、お雑煮の会、収穫体験	佐竹台地区新春交歓会、家族会新年会、さたけん家障がい者週間会議、評議員選任・解任委員会、ボランティア養成講座
2 月	収穫体験、布展見学、はっさくジャム作り、フラワーアレンジメント、きらめき旅行、きらめき昼食会	職員健康診断、歯科検診意見交換会、介護保険研修、相談支援研修、理解促進講座
3 月	九十九物語観賞、フラワーアレンジメント、吹南地区福祉ふれあい祭り、ハートふれあい祭り、コーヒー教室	セルフヘルプ図書館研修、ダルク研修、吹田しあわせネットワーク、輪にネット会議

平成 28 年度 利用者概況と開所状況

○ブルーリボン

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
31 名	5 名	7 名
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
270 日	3,430 人	

○きらめき

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
22 名	1 名	4 名
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
241 日	1,894 人	

○合計

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
53 名	6 名	11 名
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
270 日	5,324 人	

# 事業報告書

平成 28 年度 指定就労継続支援 B 型事業所 サフラン

## 1. 利用者の状況

作業所時代からの利用者と、事業移行してから利用が始まった人とは年齢も事業所に対する価値観も差異がある。新しい人にとっては利用開始時に利用目的が明確なため、必要な部分のみを利用する場・力をつける場という位置づけが主となる。反対に昔からの利用者はサフランへの愛着も強く、ずっといたい場・生活の場・働く場としての作業所文化を大切にしている。自分にとってサフランがどのような場なのか、年齢ばかりでなく、サフランへの思いがそれぞれに異なる中での支援が必要となった。

## 2. 支援内容

### (1) 新たな場への模索・動きがはじまる

日々の通所や生活が整い、それぞれの生活に新たな変化がはじまる 1 年だった。アルバイトの継続や就職、社会適応訓練事業や就労移行支援事業など就労に向けた動きや、家族から離れてグループホームでの暮らしの希望もあった。それぞれの状況に合わせた結果、さまざまな制度や機関を活用することとなり、年令の若い利用者を中心に、サフランをステップの場として活用する動きが目立った。

### (2) 高齢化

現在 60 代以上の利用者は 3 分の 1、50 代以上となると実に 6 割となる。高齢化に伴う認知や身体的な問題が原因で、通所ができなくなる利用者が増加した。併用している生活介護事業所への通所が増えたり、リハビリを理由に高齢者デイサービスを併用したりすることで、サフランに 1 日でも多く通いたいという本人の希望に沿えなくなることもあった。また利用者が家族を介護施設に入居させる決断を迫られたり、同居する家族が入院してご自身はショートステイを繰り返さざるを得なくなったりと、家族の高齢化に伴う様々な問題が利用者の生活に影響するケースもよく見られた。こうした問題に、地域包括支援センターや介護サービス機関などとも連絡をとり、その他必要な機関と速やかに連携を行った。

様々な問題に直面する中で、ただ安易に移籍やサービス利用を促すのでなく、その時々でサフランとして支援できることを検討し、お互いが納得いくまで話し合ってきた時間は、その後の信頼関係に大きくかかわったように感じている。最後まで本人の希望と決定がどこにあるのか、本人の思いに寄り添い続けることの大切さを再認識した。

また、こうした心理的な支援や調整だけでなく、サフランが所有する車両にステップを常備したり、和式便所を改修したりと、事業所の環境整備にも努めた。

### (3) 日常の対話

面談という形式にばかりとらわれず、日常的な対話の中で利用者の思いを聞き取り、本

人の不安や直面する困難な状況に対する支援を行うことで希望を実現してきた。本人だけでなく家族や支援者、他の利用者も巻き込んだ、緊急性の高い問題も増えてきているが、日常の対話を積み重ねていくことで、大事に至る前に即座にサフランが発信元となって支援機関に連絡するなど、適切な対応をとるよう努めた。また、本人の自己決定という言葉に逃げ込まず、職員としての思いを伝える努力を行った。時には利用者とぶつかり合うこともあったが、結果的に本人が視野を広げた上で、あらためて何を望み、何を選ぶのか、ともに確認し合うこととなった。

#### (4) 枠を超えたプログラムの設定

就労を目指す人のために SST を設定したが、参加者の希望は就労という枠を超えて、うまく断ることや気軽な頼み方など、より身近で日常的な内容へと広がりを見せるようになった。また本人が語る場として「ひばり」、家族向けに「家族茶話会」を実施しているが、どちらもサフラン利用者ばかりに限定せず、さまざまな人が参加できる場としたことで、より広いニーズを知り、深まりを持つ場となった。

レクリエーションについては、利用者が自由に希望を書くことができるように、本年度も白紙の年間行事計画を貼り出した。全体で動くことばかりでない「梅田へパフェを食べに行きたい」「8年ぶりに甲子園に行ってみたい」「市報で見たイベントに行きたい」「風呂へ行きたい」という個人単位や数名単位の希望も実現させている。アピールすることが希望を実現させるという積み重ねは、自身の将来の希望を語りだすきっかけにもつながったと感じる。

#### (5) ボランティアの存在

2年前からボランティアグループアムールが活動する場「サフカフェプレミアム」を作り、抹茶を点てて語らう時間を月1回持っている。茶をうまく点てたい、茶菓子と一緒に味わいたい、茶飲み話を楽しみたいなど、利用者はそれぞれに楽しみ方を見つけて参加しており、いろいろな話が語られる。毎回ボランティアからは「こんな話を聞く機会が今までなかった」「みんなが待ってくれるのが伝わる」と感想を聞く。事業所運営や職員のかかわり方についても率直な意見を聞かせていただくこともある。また、個人で登録いただいているボランティアにも、行事へのお誘いや情報を伝えている。ボランティアが活動の中で戸惑いや感じたことを表現できるよう、活動日誌を作成し、事業所側とコミュニケーションがスムーズにとれるよう工夫している。

### 3. いかに地域に根差したサフランの役割を果たすか

吹田市から委託を受ける配食事業は近年、件数が減少している。サフランが所在する青山台近隣センターも客足が減り、商店街に立ち寄るお客を当てにすることが難しくなっている。自分たちの力で客を呼び込もうと、弁当屋サフランのコンセプト『赤ちゃんからお年寄りまで安心して食べられる食の提供』を強みとして、店頭での無農薬野菜の販売や北千里文化祭での松茸弁当の販売、近隣へのポスティングの強化をおこなった。バザーでも

冷凍食品の使用をやめ、手作りでの販売を心がけた。結果、幼稚園やPTAといった団体や子育て家庭など、若い母親を中心とした新たな客層が開拓されつつある。付加価値の高い商品やサービスを提供することで、福祉事業所としての側面とは別に、弁当屋サフランとしての側面が提示できたと感じる。この流れが売り上げへと反映してくることを期待している。

#### 4. 職員の資質向上に向けて

##### (1)他職種との協働―視点の変化―

前々年度より調理・配達・事務・福祉の職員の役割を明確にして、常にコミュニケーションをとる中で、それぞれの職員が役割を果たし、互いに支え合う体制が生まれた。福祉職員は、より専門性の高い仕事に時間を費やせるようになった。その一方で、生産活動を支える職員の力量を目の当たりにし、彼らの力を活かしていくことが、生産活動の広がりにつながるということにも気づいた。紙すき事業ではこの経験を活かし、弁当づくりに次ぐ生産活動の柱として育てていくに当たって、紙すきを主担当とする職員を採用することで、新たな商品開発に向けて大きく前進することができた。

##### (2)申し送りの強化

福祉職員以外にも多様な職種が働いていること、通所日数が異なる30名の利用者がある中で支援を行っていることから、利用者と、直接話を聞いた職員とだけの申し合わせにならないよう、日々の振り返りを徹底し、報告し合い周知を図っている。調理や配達、事務職員とも定期的なミーティングの場を設定して協力を依頼することで、全体として支援を行えるよう工夫をしている。また受講した研修の内容や、日々感じていることを伝え合うなどして、現在の状況を再認識し自身の役割を見直す時間を作っている。

#### 5. 総括

様々な思いをもった4名の新規利用者を迎える一方で、就労や身体的な事情での通所困難など、様々な理由から5名の退所者がおられた。それぞれに置かれた状況や希望の異なる利用者には、どのように寄り添うのかを考える中、サフラン単体の支援には限りがあり、どのようにつながっていけば広げられるのか、理解できるようになってきた。そうして考えてきたことが、内向きには多様な職種の職員の協働、外向きには他機関との連携の広がりへと活かされてきている。

活動を通して多様な人々が利用者に関わる中で、福祉職員だけでは気づけなかった、その人が本来もっていた輝きや力に気づく場面が多々あった。あらためて、病気がその人のすべてではなく、一部であり、障がい者である前に生活者なのだと感じる。

生活の中で行き当たる問題や抱く希望は、状況によって変化していくこともある。職員の思いや理想ばかりに囚われず、そうした流れに柔軟に対応し、利用者の立場に立った支援を今後も行っていきたい。

平成 28 年度 事業実施状況

	事業所活動	その他
定例	弁当作り・配達・屋台出店・自主製品作り 服部緑地植物園園芸作業(毎週火曜日) 連絡会(月 1 回)、資源ごみ回収(偶数月) 利用者ミーティング(月 1 回) 調理ミーティング(月 1 回) 大掃除(月 1 回)、野菜販売(月 1 回) ふわふわの会 (月 1 回) ブルーリボンケーキ販売(月 1 回) サフカフェプレミアム(月 1 回) SST(月 1 回)、本人の語る会ひばり(月 1 回)	のぞみ福祉会職員全体会議(月 1 回) のぞみ福祉会事務局会議(月 1 回) 青山台近隣センター商店会会議(月 1 回)、吹田市自立支援協議会日中活動部 会(月 1 回)、NPO 法人すいたの輸運営 協議会(月 1 回) 防災についての勉強会(月 1 回) のぞみ福祉会法人内研修(月 1 回) のぞみ家族会役員会(月 1 回)
4 月	レクリエーション(花見) シャロン千里「和み展」出展 レクリエーション(北公園へ散歩)	のぞみ家族会総会
5 月	レクリエーション(バイキング)、浜屋敷バザー S リーグソフトボール大会、施設内歯科検診 レクリエーション(ブルーリボンでお茶)	ええもんフェスタ実行委員会 虐待防止勉強会 のぞみ福祉会評議員会 北千里地区施設連絡会
6 月	サフラン総会、ギャラリー見学 S リーグソフトバレー大会 レクリエーション(カラオケ)	施設連絡会総会 社会福祉協議会施設連絡会総会
7 月	ギャラリー見学、レクリエーション(女子会) 青山台夏祭り、 レクリエーション(エキスポシティ) 復帰協主催ボーリング大会	のぞみ家族会例会 植物園園芸作業監査 のぞみ防災勉強会
8 月	レクリエーション(男子会)、納涼会 サフランカフェ	就職者を祝う会
9 月	青山台地区福祉委員会と交流会(BBQ) レクリエーション(ミスタードーナツミュージアム見学) レクリエーション(会食)	のぞみ防災勉強会
10 月	S リーグソフトボール大会 ブルーリボンギャラリー見学 浜屋敷手づくり市バザー 吹田ええもんフェスタ レクリエーション(パフェ、竹明かり)	植物園園芸作業監査 土屋先生講演会
11 月	第 3 者委員中西基さん訪問 北千里地区公民館文化祭 ネパール報告会 青山台ふくしふれあい祭り 一泊旅行(滋賀・京都)	青山台ふくしふれあい祭り実行委員会 北千里地区施設連絡会
12 月	障がい者週間の集い 青山台地区福祉委員会と交流会(クリスマス会) ひばり・HOPE 合同忘年会 サフランクリスマス忘年会 レクリエーション(忘年会)	のぞみ防災バスツアー
1 月	オールドブル注文、防災訓練、レクリエーション(男子会) さたけんち障がい者週間	植物園園芸作業監査
2 月	レクリエーション(カラオケ) アンガーマネジメント研修	健康診断
3 月	青山台地区福祉委員会と交流会(卓球大会) ハートふれあい祭り、レクリエーション(バイキング) 消しゴムハンコ講習会	のぞみ福祉会評議員会、 植物園園芸作業監査

平成 28 年度 利用者概況と開所状況

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
31 名	4 名	5 名
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
260 日	3,678 人	

# 事業報告書

平成 28 年度 地域活動支援センター シード

## 1. 活動内容

### (1) グループワーク活動

吹田市が実施していたグループワーク事業を引き継ぎ、2つのグループで年間 71 回実施し、のべ 332 人の参加があった。人と交流したいが不安が大きく、自宅でひきこもりがちな生活となっている利用者を対象に実施している。内容はミーティング、軽作業、調理、外出などで、定員は 1 グループ 6 人としている。ここでは、みんなで取り組める活動を通じて、人と交流する楽しみや、人との距離感を知ることが目的としている。一人ひとりの個性やペースに合わせ、できることから始めてもらい、短時間の参加も可能とした。そのことにより、利用者は休むことなく参加されている。利用者同士の横のつながりも生まれる中で参加が定着し、グループワーク以外のプログラム利用にも広がるなど社会参加のステップの役割を果たしている。一方、新規利用者が増えて定員に達したことから、地域の障がい者にとってグループワーク活動の必要性をあらためて実感した。次年度はグループを増やし取り組んでいく。

### (2) プログラム活動

フリースペース・スペース開放は 91 回実施し、のべ 363 人の利用者を受け入れた。プログラム中に利用者間のトラブルが発生した場合も、落ち着いて対応できるよう、ピアミーティングで対応方法を検討した。常に利用者が楽しく過ごせる憩いの場となるよう努めた。日頃、訓練事業などを利用している人がふらっと立ち寄れる場として定着している。

作業プログラム(ぬり絵・パッチワーク・絵手紙・発送作業・麻雀教室)を 36 回行い、のべ 158 人、1 回平均 4 人の参加があった。

調理プログラム(ぎょうざ・たこやき・お弁当・おかし)を 23 回、のべ 80 人、1 回平均 3 人の参加があった。

運動プログラム(ピンポン・お出かけ・街かど探検隊)は 14 回行い、のべ 71 人、1 回平均 5 人の参加があった。

掃除プログラムは(月掃除・大掃除)を 8 回、のべ 31 人、1 回平均 4 人の参加があった。

グループワークが定員に達したことから、月曜日と火曜日の午後のプログラムを見直し、新規の方も利用されている。

月曜日は隔週開催から毎週開催へと実施回数を増やし、主に行っている調理プログラムでは季節に応じたメニューを提案している。

火曜日は、短時間の利用で多様な活動が可能なプログラム行っている。8 月から始めた「麻雀教室」は、初心者でも分かりやすい内容で、ピア職員による丁寧な指導が好評である。また 1 月から始めた「ピンポン」は白熱した試合展開を通して、いつもとは違う利用者の

一面を見る機会となっている。いずれも人気のプログラムとして参加者が増えている。

利用者が参加しやすいように曜日を固定し、配慮も行き届くように職員 2 名の体制で行っている。

職員が増えたことで、それぞれの持ち味で利用者寄り添い、それぞれの個性や変化をより多く感じ取れるようになった。利用者情報の整理、職員間の情報共有を進めている。

## 2. 地域交流活動

障がいに対する理解を深めることを目的とし、地域住民と一緒に季節ごとの行事を実施した。誰でもが参加できる行事として、バザー、流しそうめん、もちつきに取り組んだ。最近では子どもの参加が増え、世代間の交流の場にもなっている。利用者、ボランティアを含め、地域の人々が楽しく交流できる場を提供することで、利用者が自然に人と関わるができる機会となった。また、藤白台地区のあじさい会に協力し、資源ごみ回収を毎月実施している。利用者が高齢の方を気遣い、軒先まで資源ごみを取りに行くなど、住民一人ひとりと関わっている。利用者にとっても、働く喜びを見出す機会となり、日中活動に取り組む姿勢の変化にも繋がった。住民の中には、訪問を楽しみに待っていてくれる方も増えてきた。これらの交流が当たり前のものになるよう今後も地域に向けたさまざまな活動を展開したい。

## 3. 総括

新規利用者が増え続ける中で、プログラム活動に関わる職員を増やして対応していった。職員が増える中で、利用者への気づきも増えた。しかし利用者の情報共有がうまくできず、利用者に対しての働きかけが不十分なことがあった。それを改善するために、一人ひとりの利用者情報を職員会議等で共有した。その上で障害福祉サービス利用などへの橋渡しの役割を果たす仕組みづくりを始めた。仕組みづくりについては、まだまだ未完成であり継続して取り組むべき課題である。他事業所の取り組み例も参考にしながら整備を行っていく。

今後も質の高い支援が提供できるよう研鑽を怠らず、利用者の夢や希望が実現するきっかけづくりを支援していきたい。

平成 28 年度 利用者概況と開所状況

○地域活動支援センター

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
238 日	3,050 人	

# 事業報告書

平成 28 年度 吹田市障害者等相談支援事業(委託相談) シード  
 平成 28 年度 指定特定相談支援事業・指定障がい児相談支援事業  
 (サービス等利用計画作成) シード・トロイム  
 平成 28 年度 指定一般相談支援事業(地域移行) シード

## 1. 吹田市障害者等相談支援事業(委託相談)

### (1)相談実績

相談内容	福祉サービスの利用等	障害や病状の理解	健康・医療について	不安解消・情緒不安定	家族関係 人間関係	家計について
28 年度	<b>1675 件</b>	<b>7 件</b>	<b>110 件</b>	<b>254 件</b>	<b>34 件</b>	<b>76 件</b>
27 年度	2017 件	3 件	102 件	91 件	20 件	37 件
相談内容	生活技術について	社会参加 余暇活動	就労について	権利擁護	その他	合計
28 年度	<b>147 件</b>	<b>59 件</b>	<b>92 件</b>	<b>22 件</b>	<b>228 件</b>	<b>2,704 件</b>
27 年度	55 件	9 件	77 件	1 件	66 件	2,478 件

相談件数は前年度の 2,478 件から 2,704 件と 226 件増えている。相談は、精神障がい者が最も多く、次いで多いのは発達障がい者やその家族からである。特に発達障がい者からの相談は年々増加している。

相談内容は「福祉サービスの利用等に関する相談」が全体で最も多かった。前年度と比較して、その変化は「不安解消・情緒不安定に関する相談」が前年度 91 件から今年度 254 件、「社会参加・余暇活動に関する相談」が 9 件から 59 件、「権利擁護に関する相談」が 1 件から 22 件、「就労に関する相談」が 77 件から 92 件へと増加している。これらのことから障害福祉サービスに限らない日常生活を見守る支援の必要性が窺える。

新規相談は 2014 年度 70 件、2015 年度 75 件、2016 年度 81 件と件数を増やしており、本人・家族からの相談に加えて関係機関からの紹介が増えている。新規相談から、地域活動支援センター利用や日中活動利用へと繋がるが多かった。

紹介元機関としては、精神科医療機関、ハローワーク、障がい者就業・生活支援センター、相談支援事業所、就労支援事業所、生活訓練事業所、保健所、市役所からであり、関係機関からのシードに対する信用が窺える。併せて障がい者の地域生活に幅広くシードの支援が求められていることが感じられた。

新規相談者への対応では、不安な気持ちで相談してきた利用者やその家族が、安心して相談できるような声かけや対応方法を意識し、制度やサービスについても分かりやすく説明することを心がけた。必要な情報を視覚的に分かりやすく提供できるように、サービス事業所の一覧を地図付きで作成し、面談時に活用している。相談者からも「分かり易く安

心につながった」と好評である。引き続き、わかりやすく情報を提供するための工夫を行っていく。

電話や来所による面談だけでなく、必要に応じて自宅や入院先などに出向き説明や支援を行った。さらに研修や吹田市内における障がい者福祉に関する各種会議にも参加し、適切な支援や情報提供が行えるよう努めた。

利用者に必要な情報を提供するために、指定特定相談支援事業所を取材し、「シード便り」においてそれらの情報を発信している。

## (2) 自立支援協議会

吹田市地域自立支援協議会には、委託相談事業所として全体会(年 2 回)、相談支援部会(年 12 回)、運営委員会(年 6 回)、事務局会議(年 6 回)に参加し、地域課題に取り組むと共に、自立支援協議会全体の企画運営にも市の担当者と携わった。会議では障がい者を取り巻く地域課題がたくさん出された。中には、施策にまで至った課題もあるが、解決の糸口さえも見出せない課題もある。少しでも前に進めるように努めていきたい。

## 2. 指定特定相談支援事業・指定障がい児相談支援事業(サービス等利用計画作成)

本年度は 67 名(シード 36 名、トロイム 31 名：平成 29 年 3 月末現在)の計画相談を担当した。年齢は 1 歳から 65 歳までと幅広い。計画作成は 85 回、モニタリングは 346 回実施した。計画作成では、利用者が思い描く地域生活の実現に向け、日々の暮らしの中で抱えている様々な悩みや課題を丁寧に聞き取り、適切な支援機関に結び付けていくことを心がけた。またモニタリングでは、利用者の希望に合ったサービス提供が行われているか、新たな希望や課題がないかなどを利用者と一緒に振り返り必要な調整を行った。

新規の計画相談利用の問い合わせは、前年度に引き続き多い。新規利用の受け入れは、職員会議で支援状況などを考慮し判断した。以前から支援している利用者のほとんどが家族の協力が得られない人や一人暮らしのため、毎月モニタリングが必要なケースが多い。シードとトロイムを合わせ 6 名が相談支援専門員として登録しているが、他事業との兼務であり、支援できるケース数を思う様に増やすことはできなかった。

吹田市全体で考えても相談支援専門員は不足しているため、吹田市や他の相談支援事業所とも協力しながら、一人でも多くの計画相談を必要としている人が利用できる支援体制を整えたい。

## 3. 指定一般相談支援事業(地域移行)

地域移行支援事業の利用相談は 6 件あり、市、病院、事業所から依頼を受けた。実際に支援を提供することになったのは 1 件で、次年度より支援を開始する予定である。本年度は前年度から継続している 3 件の支援を行った。支給決定は吹田市、尼崎市、大阪市が各 1 件であった。3 月末時点で、1 名が退院し支援終了、1 名が支援を継続しグループホームの体験利用中、1 名が退院に至らず支援を終了している。

支援では利用者との外出同行、面談を中心に寄り添い、待つ支援に努めた。その結果、利用者が自分のことを話せるようになり、改めて自分の希望する生活について考えるきっかけとなった。時間はかかるが自己決定していく力を取り戻すことにつながっている。

その他、家族との連絡調整、医療・行政等に対する生活基盤に関わる調整、住居の選定、生活用品の購入や契約等の諸手続きの補助を行った。

支援を行ってきた中で見えてきた課題として、広域にわたる支援および、支給決定期間があげられる。入院前住所が吹田市以外の場合、手続き上頻繁に前住所地の市役所等に向く必要がある。その移動や手続きの煩雑さが入院中の利用者にとって大きな負担になることが多い。事業所にとっても本来の活動地域ではないため、時間や費用等の負担は大きい。また、市町村によっては支援の進捗、本人の状況にかかわらず 6 か月での退院を求められることが依然みられる。これらのことが結果的に退院を妨げる要因とならぬよう、行政・医療・地域等の支援者間で緊密な連携を行うことが必要である。利用者に対しての支援やそれぞれの役割について共有し課題に取り組んでいく必要がある。特に行政機関には利用者のおかれている環境、実情を鑑み本人に寄り添ったあり方を求めている。

#### 4. 総括

吹田市での相談支援をとりまく情勢が大きく変化していく中、これまで計画相談を行い感じたことは、現状の福祉サービスに利用者をつなげるだけでは不十分ということである。大切なことは、利用者に元気になってもらうこと、思い描いていた生活を思い起こしてもらうことである。そのために、まず何から始めたらよいかを利用者と支援者と一緒に考えることだと再確認した 1 年であった。このように利用者寄り添う支援は、必然的に求められるものとする。私たち支援者は情勢に流されることなく、今まで蓄積した専門性を活かし、常に利用者と同じ目線で意見を交わすことを心がけ、利用者自身の生活がより充実したものになるように頑張っていきたい。

平成 28 年度 利用者概況と開所状況

○委託相談

4 月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
238 日	2,704 人	

# 事業報告書

平成28年度 共同生活援助(介護サービス包括型) エスペランサ  
(住居名 エスペランサ よつば荘 ピオラのぞみ プレジールのぞみ  
エスペランササテライト ピオラのぞみサテライト)

## 1. 支援活動

### (1)利用者への支援

本年度は、新たに吹田市の補助金を受けなくても利用者に負担の少ない物件が見つかり、他市の方でも利用が可能な3名分の住居としてプレジールのぞみを設置した。長期入院で他市出身の方が吹田市に退院することも可能となった。

地域移行支援利用中の方が11月から体験宿泊を開始された。他に家族からの自立を考えている方2名が体験を希望され、少しずつ宿泊されることが増えてきた。サテライト住居利用の方たちの生活も落ち着いてきたので、今後は新たにグループホームを利用される方の生活を作っていくための支援を中心に考えていきたい。

エスペランサではご家族の事情で、だんだんと家に帰ることが難しくなってきた利用者や、もともとご家族と縁が薄い方もおられるため、日中活動先の長期の休みの時には世話人・生活支援員の配置を厚くしていく必要を感じた。

### (2)利用者ミーティング

エスペランサでは新たなルールを作りたいという意見が出た時以外は、光熱費や食費として預かっている金額と実際に使った金額について報告したり、その場で現金の確認をしてもらったりしている。細かな提案などもあり全員で意見を述べ合っている。

ピオラのぞみではレクリエーションなどもミーティングで決定し、隔週での夕食会も定着してきた。時にはたこ焼きパーティーに変更するなど、グループホームでは楽しいことを中心にすることで日中活動への意欲を高めてもらえるよう工夫した。

二つのサテライト住居もワンルームなのでピオラのぞみのミーティングに参加してもらえるよう配慮した。

## 2. その他活動

### (1)連絡会

エスペランサは例年通り、偶数月に連絡会を行った。利用者、利用者家族、職員などで構成し、エスペランサの運営やグループホームの制度について情報を提供し話し合う場となった。ピオラのぞみでは奇数月に家族連絡会を行った。サテライト利用者の家族もここに参加していただくことにしている。プレジールのぞみでも定員が埋まった後、連絡会を始める予定である。

### (2)地域の一員として

エスペランサでは地域の行事参加に積極的な利用者もいれば、自分がグループホームを利用していることを周辺に知られたくないと考える利用者もいる。そのため、今まで全員参加を強制することはしてこなかった。それでも長く生活する上で地域の人たちが自然に顔見知りとなり、同じマンションの住民として受け入れてくれている。またマンションの行事に時々参加する利用者が、職員なしで防災訓練に行つてエスペランサで内容を報告してくれた。

ピオラのぞみはワンルームマンションという建物自体が、地域と緊密な関係を持たなくても生活できる環境である。そのため時間をかけて周辺の住民と会釈を交わし、挨拶し合うようになることで、何気なく存在を認知してもらい、自然に地域に溶け込んでいくことを目標に取り組んだ。

プレジールのぞみは、まず地域の方とスタッフが挨拶を交わし、わからないこと等を気軽に聞ける関係を作っているところである。

### 3. 施設運営管理

#### (1)危機管理

危機管理マニュアルを各住居の共有スペースに掲示した。エスペランサではマンション内に防災委員会があり、その委員会が主催する防災避難訓練に自主的に参加する利用者がおられ、その延長線上で自治会活動にも誘われる機会が増えた。吹田市防災マップに基づき避難場所の確認を兼ねて散歩に行くことも行い、いつでも大規模な災害時に避難するところを頭に入れてもらえるようにした。グループホームでは夜間休日に何か起きた時と、平日日中活動先が開いている時とでは対応が変わるため、職員もミーティングで随時自分たちの責任と利用者の安全確保について学びあった。ピオラのぞみでは利用者全員で一時避難所へ行く訓練を行い、定期的に安全について話し合う機会を持った。

#### (2)苦情への対応

事業所内窓口の他、第三者委員、吹田市障がい福祉室、吹田市虐待防止センター、大阪府社会福祉協議会運営適正化委員会の電話番号を重要事項説明書に明記し、各住居内に掲示している。

#### (3)人権擁護

職員が大阪府・吹田市が行った虐待防止研修、関係団体が行った人権擁護や、障害者権利条約に関する研修などに積極的に参加し、人権意識を高めた。また、これらの研修については職員間での伝達研修により情報を共有し、全員が知識を深めた。

### 4. 総括

利用者それぞれが希望する生活を送るための支援を提供できるよう努めた。体験宿泊利用の方も含めると利用者12名、一般就労している方からほとんど日中在室しておられる方まで幅広く、職員の配置に工夫が必要になってきた。仕事を終えて帰宅される利用者を出

迎え、安心してまた明日の仕事を頑張ってもらえるよう、在室がちな利用者には散歩や外出の支援が行えるよう配慮した。利用者のライフステージに寄り添い、今後も安心して住み続けることができるグループホームにするために職員の質を高め、利用者の様々な状況に対応できる支援体制を目指してきた。ご家族にも「親亡き後」に安心感を持ってもらえることだけでなく、お元気な間に実際に自立される姿をみていただきたい。今後の情勢を見極めながら住居を増やし、安定した経営状況を維持し、利用者が将来にわたり安心できる住まいを提供していきたい。そのためには市民全般への精神障がい理解促進、啓発についても、継続した課題として取り組んでいきたい。

平成28年度 事業実施状況

個別支援	対外活動
カンファレンス 通院同行 認定調査に伴う手続等支援 見学案内 体験宿泊受け入れ 手続き・書類作成等 契約面談 共同生活援助計画面談、アセスメント等 個別面談 家族支援 相談、家事援助等 レクリエーション 防災訓練 防災ミーティング(年3回) 入居者ミーティング(隔月) 連絡会(隔月) 散歩など余暇活動支援 忘年会、大掃除など	大阪府感染症・食中毒予防対策研修受講 大阪府虐待防止研修(管理者研修)受講 吹田市虐待防止研修受講 吹田市地域自立支援協議会全体会(年2回) 〃 運営委員会(隔月)、事務局会議(毎月) 〃 居住支援部会(隔月) 〃 医療課題検討部会(年4回) 〃 (仮)精神障がい者支援部会準備会 精神保健福祉ネットワークワーキング(年8回) 精神保健福祉ネットワーク会議(年4回) ピアサポーター事業よつば会及び打合せ(月1回) 地域移行アドバイザー事業 ピアサポーター交流会・研修会(年4回) 北ブロックピアサポーター交流会(年4回) 日本グループホーム学会 全国グループホームスタッフネットワーク 近畿グループホームスタッフ研修会 吹田地域精神医療学習会(月1回) 精神障がい者ニーズ研究会(随時)

平成28年度 利用者概況と開所状況

4月当初在籍者数	新規入所者数	退所終了者数
9名	1名	1名
開所日数(年間)	延べ利用者数(年間)	
365日	3,135人	